①

イスラームと女性

The Status of Women in Islam

المرأة فى الأسلام

イスラーム入門シリーズ №10

M・A・クルバンアリ

ISLAMIC CENTER, JAPAN

目次

一、女性は母である……1
二、社会と女性……4
三、女性解放の第一歩……6
四、未来への基地＝家庭……17
五、一夫多妻制……22
六、一妻多夫とのちがい……29
七、女性の服装……32

一、女性は母である

日本でイスラームの真の姿を多少なりとも知っているのは一部の識者と信者にかぎられるようだ。一般には、西欧の偏見と悪宣伝によるゆがめられたイスラーム観があり、なかでもその女性に関する面は大きく誤認されている。イスラームは、唯一なる創造主との対話の中で豊かな人生をおくり現世と来世で成功するための人間本来の生き方であるから、そこには男女双方にたいする公平な生き方の定めがある。

男女は人間としてまったく平等であり、同等の権利をもつ。しかしこれは男女それぞれの特性を生かした平等と権利であり、なにがなんでも同じに扱うことではない。女性が母として子を産み育てる役割は人類存続のための大前提であり、そこに女性の真の美しさがある。全世界で一番大切な人は母であり、すべての女性は母になりうるから、すべての男性に尊敬され、大切にされなければならない。

現代の欧米や日本では、金銭的自立が人間の一人前になる尺度である。そこで女性も一個の人間として働き、収入をえる。性の平等のためには、女も男とおなじように働いて収入を得るべきだと考え、それがいつのまにか社会通念になっている。ここには大変な錯誤があるようだ。女性は過去、現在、未来を通じて母としての役割を担っている。人類存続のための大きな仕事をすでにしている

のだ。その上にまだ、生活のための悪戦苦闘を強いるのか。

「人類存続のための個々の男性の役割は、女性のそれとくらべてほとんど無視できる。そのためには、ほんのひとにぎりの男性がいればよい。」男性の役割はよりよき社会を建設することだ。だから、働いて収入をもたらすのは男性の義務であり、女性はそれを家族のために使えばよい。

これは一部の偏狭なイスラーム圏の学者がとなえる、女性を家庭内に閉じ込める考え方ではない。預言者の時代から女性は社会的、政治的、経済的に家庭の外に出て活躍していたし、聖クルアーンの中で「醜行を行う女性は家に閉じ込めよ・・・・」（第四章一五節）とあるのは、それ以外の女性の自由を束縛するものではない。イスラームは女性の社会的に健全な職業をはばむことはない。政治や公の仕事に就いてもいい。しかし子育ての義務は、母親にかわりうるものはいないから、どんな仕事にも優先させるべきである。人類存続のためのその聖なる任務を放棄しないかぎり、つまり必要なときに仕事を交替してくれるものがいるかぎり、どんな役職にも就ける。ただ、自分以外に責任をとることができない職業、たとえば国家の首長や戦争のときの軍隊の司令官などは、母としての任務を妨げるおそれがあるから、奨励されることではない。禁止されていることではないが、預言者の言葉として「女性を首長とする民族は繁栄しない」と伝えられているのは、差別ではなく、こういう観点からだろう。

女性にとって母になることは人類存続のための聖なる使命ではあるが、もちろん人間として社会に役立つことをはばむものではない。女性も社会のための重要な仕事ができるし、女性でなければ

できない仕事も多い。人類の未来やよりよい社会の建設のために男性があまり貢献していないのなら、一部の重要な分野で女性がとってかわるべきかもしれない。ただ、単に生活のため、金銭的苦労のため、母たる女性が身をすり減らして働かなければならないのは悪平等であり、不公平であるといいたい。

問題は、母であることを、女性を含めたほとんどの人々が忘れようとしていることだ。性のちがいをなくさなければ人間として同等にはなれないと錯覚している。男性には男性の役割があり、女性には女性の役割があることを無視して、一個の単なる人間として扱われたいと思う。だから「人間は動物とちがって子を産むため以外に性交をたのしめる」とか「女性には産まない自由がある」などとへ理屈をこねる。たしかに、ある状況において子を産むことが危険であったり、はなはだしい困難をもたらす場合があるだろう。だが、そうではなく、個人としての快楽を優先させるためなら、それは人類のための義務を放棄することであり、人類の存在を否定する大罪である。

「産みたいひとが産めばいい」というのも成り立たない。皆がそう考えれば人間はいなくなる。子を産まなければ人類は存続できない。そして母が子を良い人間になるように愛情をもって育てなければ、排他的な人々があふれ、人類の文化も社会も壊滅するだろう。産まない自由を主張する者は、自分の母あるいは祖先がそのような考えをもたなかったからこそ自分が存在しているのだということを、どう受けとめているのか。産まない自由ということは、自分のことを考えているからだ。子供のためでも、社会や人類のためでもない。もし何かの問題によって、子を産むことが困難や危険

なら、その場合は他の問題であり、自由の問題ではない。

自分だけを中心として考えるから、母になるか否かは自分で決める問題だと思っている。子を産んで育てるかどうかは、子が欲しいかどうかの問題だという。子は親のものという感覚だ。自分中心主義。そこから断絶や非行やいじめがスタートする。産まない自由などという人々は、自立と独立を求めすぎて、かえって自分を人類の流れから切り離してしまい、自己の存在感を失ってゆく。あるいは、自己の存在意義など認めていないのかもしれない。偶然に生まれてきて、なんとなく死んで行く。生まれてきたから、しかたなく生きている。生きていても死んでも変わりはないが、わざわざ死ぬこともない。そして人類が存在しようと滅亡しようと、どうでもいいことなのだろう。

母がいなければ自分も存在しない。母を大切にしなければ自分も大切にできない。母を否定することは自分を否定することにつながり、知らぬまに心の奥底に自己否定の観念が醸成される。自殺が増え、犯罪や戦争が起きる。親を否定し、子を否定するものは、人類の流れにおける自らの存在も否定せざるをえないからだ。そして自己の生命を肯定できないものは、他人の生命など尊重できるわけがない。

二、社会と女性

社会の単位は個人であるとよくいわれる。これは全体主義の弊害から個人の自由と尊厳を護ろう

とする発想であり、否定してはならない大切な理念を含んでいる。だがそのかたわら、この思想は個人主義への道をひらいている。個としてのアイデンティティを主張するためには、どうしても他人との相違を意識しなければならない。それがエスカレートすると、ひとは他人との共通点は求めず、心の中に壁をつくり、その中に埋没して他人をしめ出そうとする。隣人への愛はうすれ、不信感が増幅される。出現するのは野獣のジャングルだ。

全体主義と個人主義は両極端であり、健全な社会の基盤としては同様に危険な思想である。個性を尊重しながら全体的協調を求める中道でなければならない。人間は個人として単独で存在することは不可能だ。ということは、個人が人間として一人前ではないことを示す。ここでいう一人前とは、金銭的自立などの低次元の尺度ではなく、人類の存在に貢献できるか否かということだ。人類というかわりに社会といってもいい。社会を存在させうる最低限の必要条件は、子を産み育てる意志と能力をもった男女、そして子である。だから社会の最小単位は個人ではなく、家庭である。イスラームはこの点を重視し「人間の生き方である宗教は、結婚することで半分達成される」といっている。昔の社会では、女性の立場はみじめなものだった。結婚にさいして同意は必要とされず、身体も財産も夫の所有となり、私的にも公的にも仕事につくことは許されなかった。証人や保証人、後見人や管理人にはなれず、自分でものごとを決定したり契約をとりかわしたりすることはできなかった。このような偏見は、地域差はあっても、世界中にはびこり、ヨーロッパでは女性は果たして家畜なみか奴隷なみかという驚くべき議論が横行し、一部の宗教会議では「女性は魂をもたず、

審判の日に復活することもない」と極論した。

このような偏見は、西暦七世紀までの世界にかぎらず、なんと十九世紀後半まで存続したものであり、今日の女性問題にまで影を落としている。いまでも、虐げられ、権利も自由を奪われ、男性の逆鱗にふれぬよう脅えながら、奴隷のように生きている女性は、洋の東西を問わず、決して少なくはない。人々が現在だけを求め、現在を拡大してくれる金銭に絶大な価値を与え、人類の存続に意義を見いださない以上、このような問題はたえることもない。

三、女性解放の第一歩

西暦七世紀、暗黒の泥沼にもがき、ありとあらゆる堕落と異常がはびこり、世界中で女性が人間以下とされていたとき、メッカの預言者は次の神託を告げていた。

一個の魂からあなたがたをつくり・・・

要するに、一個の魂からつくられた男と女は同じ人類であり、人間として同等の存在であるというのだ。二十世紀・今日の話ではなく、千四百年まえのアラビアの話である。イスラームという人間の道における女性解放のまさに巨大な一歩だった。

男女は人間として同等であり、平等に扱われなければならない。だが、平等とはいったいなんだろう。各人各様の要求の種類とその度合いに応じて満たさなければならないものだ。そのためには、本人の過去、現在、未来におけるすべての外的・内的要素を調べあげ、そのうえで同等の満足感を与えなければならない。こんなことは不可能だ。すべての要素を知り尽くす能力は、人間にはない。だから人間がつくった法律や制度は個々の人々にたいして平等ではありえず、人間には必ず不満がのこる。個々の人々という大きな範囲ではなく、男女間にかぎっても、同様にすべてを知り尽くすことはできないから、やはり平等はありえない。

ところがイスラームは、自らのシステムが人間のつくったものではないと主張している。もし人間をつくったアッラーが定めた制度なら、当然、人間性のすべてを熟知しているはずだから、完全に平等であってもいい。そこでイスラームのシステムを調べてみると、一見不平等にしかみえない奇妙な点が浮かびあがってくる。たとえば、遺産相続での女子の取り分は男子の半分にすぎないこと、あるいは証人として女性二人が男性一人に相当すること、また一定の条件の下で一夫多妻は認められているが、逆の一妻多夫は認められない。

遺産相続が男子の半分ということは、そこだけを考えれば、たしかに不公平だ。だが、イスラームでは扶養の義務は男性だけのもので、夫は自分の財産で妻と家族を養わなければならない。これにたいして妻の財産は妻だけのもので、夫や家族を養うどころか、自分の生活のために使う義務さえない。これもまた不公平な話で、男性側からいえば、遺産相続での女子の取り分はゼロでもいい。

証人としての男女の違いは、その生理学的な相違からくる。一般的に、子にたいする愛情は母性の方がはるかに深い。数億の精子のどれが子に参加するかについて男性はまったく無関心だ。確率の問題にすぎない。これは男性の本能であり、この本能は男性のすべての考え方や行動を支配する。感情面の豊かさやこまやかさにおいて女性にはおよびもつかない。子にたいする愛情が根本である母性本能はすべての女性に備わっていて、その感情の豊かさが人類の流れを絶やさないための根本的な本能である。だが、当然、愛情の豊かさやこまやかさの劣る分だけ男性は客観的になれる。証人としては、事実を事実として客観的に述べなければならない。この観点から女性の証人は二人必要だという。それは機能の違いにすぎず、平等か否かの問題ではない。

公平とか平等ということは、人間の欲求をすべて満足させることではない。そうなれば欲求と欲求が角つきあって社会は自滅してしまう。逆に、欲求の一部を抑制し、円滑な人間関係を促すためのものだ。その概念は人生の価値基準や目的、趣味や好みによっても大きく異なる。なにが善でなにが悪か、何のために生きているのか、人間とは何か、生と死は何を意味するのか―こういう根本的な問いに答えなければ公平とか平等という概念は定まるはずもない。

宗教をもたない国家や民族にはその質問への答えはないから、公平や平等を計るものさしがない。考え方の角度をちょっと変えるだけで、白は黒になり、サギはカラスになってしまう。そして考え方の角度は、同じ国民であっても、一人一人異なる。それをむりやり統一してしまうのが「イズム」だろう。ナショナリズム、キャピタリズム、コミュニズム等々。

それらの質問に答えを与えるのが宗教だ。他のイデオロギーでも答えがあるというかもしれないが、もし答えていれば、それは宗教だ。ナショナリズムもコミュニズムも一種の宗教になりうる。宗教には、正誤はべつとして、前記の質問に対しての答えがあり、人生には目的がある。当然、その目的に照らして、なにが善でなにが悪か、平等か否かの基準がはっきりしているはずだ。

イスラームの教えを考えてみよう。唯一無二のアッラーを信仰し、生まれてから死ぬまで学び続け、自己の能力を最大限に発揮して、平和と調和によって地球を管理し、健全な人類の未来を建設するために協力する。そして永遠の生命をえるための導入部分である現世において、その資格をもつために徳を積むことだ。アッラーの別名は真理、慈悲、正義、寛容、などであり、アッラーを崇拝することは、必然的にそのような美徳を身につけることになる。

男女は同等の人間として、結婚の契約をむすぶ。両性の合意が不可欠であり、娘の同意なく親がかってに嫁がせることはできない。立ち会い人や証人の列席した結婚式が挙げられ、きちんとした結婚契約が交わされる。結婚契約書には双方の条件が記載され、それは証書となり法によって護られる。その条件としては、反社会的・反宗教的でなければなにを書いてもよい。男女双方は家族や親戚などと相談し、互いの条件を検討したうえで結婚する。違反者は相手によって告訴され、法によって裁かれる。愛に盲目となる若者同志には無味乾燥なしきたりにみえるかもしれないが、あとで後悔するよりはいい。

結婚条件として記載されなければならないもののひとつは、マフルと呼ばれる夫から妻への贈答

金である。これは売買婚のように妻の父母や家族に支払うものではなく、夫から妻への義務であるから、両人の合意によって金額と支払い方法を定めてよいが、これを支払わなければ離婚は成立しない。夫は妻を離婚できるが、種々の待機期間が定められていて、その間、妻を親切に扶養しなければならない。また、互いの家族や親戚などによる調停を受けた方が望ましい。夫からの離婚宣言は二度まではいつでも取り消せ、その間によりがもどれば離婚は成立しない。三度目で離婚が確定し、マフルの残金が支払われる。妻が身ごもっていれば、子を産んで育てるまで、あるいは他の男と再婚するまで、扶養義務は夫についてまわる。（クルアーン2章227節～241節より）

妻も離婚できるが、夫の義務を履行させるためには、ある種の条件が満たされなければならない。たとえば、結婚契約に対する夫の違反、夫の性的不能や精神病、夫が妻と一年間にわたり同居しないとき、夫が家族を扶養しないとき、妻を不当に扱うとき、あるいはその他のケースで裁判官が適当とみなすときなどである。

夫は妻を愛し尊敬し家庭を運営するための資金を提供し、妻の働きに感謝する。妻も夫を愛し尊敬し、夫の働きに感謝する。社会の単位は個人ではなく、家庭である。通常、夫が外で働くが、必要に応じて立場をかえる場合もあるが、家庭が社会の単位として機能することにかわりはない。

男女が人間を構成する割り符であることを忘れ、互いに一人前の個人と考える場合、結婚は自分たちのためであり、子をもうけることは夫婦の勝手である。もっとも、意識や理屈のおよばぬ心の奥底において、人間の本能として子をもちたいという気持ちはあるだろう。だが、それを真剣に考

えるわけではなく、夫婦生活はあくまで自分たちのためだ。男女が愛情によってむすばれ、性欲を満たし生活のための便宜をえるためには、なにも結婚で互いを束縛するまでもなく、同棲するだけでいいと考える。それでもなぜ結婚をするかといえば、相手を独占するための儀式としてであり、はた目を気にし、同棲に対して自分でも理解できないやましさを心のどこかで感じるからだ。また、そのようなことをまったく気にせず、結婚の理念そのものを無視するものも多い。

男と女は人間の半分にすぎず、その半分同志がむすばれて、はじめて社会の一単位として人類の未来の建設に加わる。結婚し、子をもち、家庭として機能し、人類存続の大義に貢献する。結婚は子を産んで育て、子のためにはっきりとした社会的基盤を与えるためのものであり、けっして自分たちだけのためではない。いわば、家庭は未来への基地なのだ。

このことを理解せず、独立した個であると思うものは、無意識のうちに人類存続の意義を否定している。当然、結婚を大切にしない。結婚どころか、異性を求める本能さえ無視するものも多い。人類の存続に価値をおかないものは、人類の未来を否定していることになる。そして現在だけに棲み、結婚して子を産み育てることのわずらわしさだけを考える。だが、性欲だけはのこる。子をつくらないように準備し、快楽だけを求めて、乱交を行う。あるいは、もっと徹底して、同性愛にふける。これなら確実に子はできない。いまの世の中にはこのようなことが氾濫している。それは人類が未来を見失っているからであり、女性も母たる立場を軽視しているからだ。

未来を見失った人類は、当然、現在を確保しようとする。未来がないから、「今」を拡大しよう

とする。時間の最小限の単位に最大限の行動を詰め込み、空間の最小限の単位に最大限の情報を盛り込もうと必死になる。時間の密度は濃くなり、秒はふくらむ。しかし、それでも、今という点は時間に押し流され消え去ってゆく。人はいらだちをもち、現在にしがみつこうとする。そして秒針の鞭に追い散らされ、タンポポの穂のようにふらふらと日々を漂う。未来を見失った人々は自らの実存を確定できず、実態のない影か幽霊のような存在になる。その存在の希薄さに喪失感を覚え、なんとか自分を色こくしようとする。他人に認められれば、ひと息つける。そうでなければ、実存感をえるため、刺激を求める。刺激されれば反応がおき、生きていることが確認でき、現在を意識するからだ。

現在を確保するため、今という「点」をつかまえるため、人々は走りに走る。暴走族はスピードに酔う。だが時間は光以上の速さで流れさる。光陰矢のごとしというが、今はあっというまに過去になってしまう。この速さに追いつける速度はない。時間に追いつくことに疲れたものは、逆に時間を自分のところにとどめようとする。あるいは、無視する。意識さえしなければ秒針の鞭に追いまくられることもなく、いらだつこともない。そこで酒の力で意識を曇らせ、時間とその中で解決しなければならない問題を見ないようにする。だがこれは一時的なもので、醒めると過ぎ去った時間の重さがなおさら意識される。それをまた追いかけなければならない。あがき、もがき、そのうちになんでもよくなる。ショッキングなことにも、あまり驚かなくなる。刺激を求める心は高まる。読者の心理を読んで、これでもかとセンセーショナルな報道があいつぐ。犯罪が起き、センセーシ

ョナリズムに煽られ、より大きな犯罪にエスカレートする。現在を護るために戦争が起き、種を絶滅させる兵器がたくわえられる。

このすべては、未来を求めず、現在に固執するからだ。未来を求めようにも、人間の姿がみえていないから、個人が社会の独立した単位であると錯覚しているから、どうしようもない。この現代の迷路から抜け出るためには人間本来のありかたを見定め、男は男らしく女は女らしく、それぞれの本分をまっとうすることからはじめなければならない。そして子を産み育て、人類の健全な未来を建設しなければならない。育児に関しての父の役割は、母のそれとは比較にならない。父は家庭と社会とのかけ橋であり、外界で仕事をし、家族を擁護・養育する家庭という単位での代表者である。この家長としての役割をまっとうして、はじめて、父は母と同等の位置にならぶ。

しかし現実問題として、子ができない夫婦もある。その場合は人類存続の大義に貢献できないではないか。それでも、その意図があればよい。赤子が欲しいと熱烈に願い、他の子供たちに愛のまなざしを向けるべきだ。その熱烈な願いがアッラーに通じ、身体のホルモンのバランスが変わり、子をもてる場合もある。また、子ができなくても、その熱情が人類の未来を求める心に昇華し、次の世代をすべてわが子と考え、世界のために大いに活躍する男女も多い。

このすべてをイスラームは一千四百年まえに打ち出している。そこには男女の肉体的・生理学的な相違とそこから生じる態度、好み、生き方などすべての要素を考慮して設定したとしか思えぬ充実したシステムがある。その男女間の一断面だけをとらえてみても、イスラームの教えは七世紀の

水準をはるかに超えたものであったことは確かだ。

イスラームの教えを現代の社会制度と比べてみよう。個人をベースとし、人間の価値を金銭的に評価する尺度からは、その教えも色あせてみえるかもしれない。だが、もっと別の角度、別の価値観をあてはめてみたらどうだろう。かりに人生は金だけではなく、人間の自由と独立は金銭に縛られるものではない。そして社会の単位は家庭であるとしてみよう。唯一の真理のもとに前世界が協力して地球を管理し、宇宙のすべてを活用し、人類の健全な未来を建設すべきだ、としよう。このような基準をあてはめれば、現代の諸制度の方が、太陽のまえの星々のように光を失うはずだ。

問題は、産業革命にはじまる物質文明の奔流が過去のすべてを押し流してしまったことにある。科学の進歩は未来に希望の光をともした。しかしながら、その物質面の輝やかしさに目がくらみ、過去の精神的遺産を忘却してしまう人類もたいしていばれる存在ではない。このことは今日のイスラーム圏にもあてはまる。かれらも真のイスラームを忘れ、西欧のあとを追おうとしているのだ。そして西欧が失敗した時点までやっとたどりついているから、なお悪い。ところどころには教えの活用がみられ、社会にそれなりの益をもたらしてはいるが、全般的には混乱にあり、真のイスラームにもとずく健全な社会を築きあげてはいない。

真のイスラーム社会では、女性は家庭の一部として人間本来の生き方を楽しめる。外に出て稼いでくるのは男性の役割だが、これは仕事の違いにすぎない。たとえば作家は手でものを書くが、オリンピックの走者は足を使うというようなものだ。どちらが上ということはない。ここでイスラー

ム圏の一部にある風俗習慣をイスラームのものと混同してはならない。また一部の教徒が教えのある部分を誤解していることもある。たとえば女性の割礼が定められているというような誤りである。

人間本来の生き方を忘れた文明は、えせ文明である。物質文明の科学もまた、えせ科学だろう。真の文明や科学は人間とは何かという問いに答えるものでなければならない。この点で真の科学は真の宗教と合致する。イスラームでは知識イコール科学（アラビア語のイルム）、神学者イコール科学者（アラビア語のアーリム）である。そしてイスラームそのものが真理（アッラーの別名）に近づくための教えである。教徒は生まれてから死ぬまで、揺り篭から墓場まで、知識を求めることを命じられているが、そこには男女の別はない。

ここで考えてみて、人間性を無視してさまざまな矛盾と危険をはらむ科学暴走社会と、真理を目的として人間性を大切にする真のイスラーム社会とは、いずれが住みよい社会だろうか。片方は、現在がすべてだと考え、自我と権利だけを主張とする世界。未来を求める人間の本性を「現在」という牢獄に塗りこめてしまう。そこには未来はない。アッラーを否定し真理を拒否するものに行く先はない。人間存在の根本から逸脱し、どん欲になり、基本的なルールからも自由になろうとアッラーを否定するものは、かえってすべての自由を失い物質の奴隷に堕ちる。真理を求めることをやめるとき、未来と希望は去り、現在という牢獄の絶望の壁が周囲をさえぎる。生きているのか死んでいるのかわからないほどの心の暗さだ。生きていることを確認するために刺激を求め、だんだん感じなくなり、より強い刺激が欲しくなる。その途中に酒とギャンブル、不信と犯罪、麻薬と覚せ

い剤があり、終点には自殺が待っている。希望の光が消えたガラスの城、穴のあいた心、北風の吹き込む心に浴びる津波のような酒また酒。その道は一本道で、なにかのきっかけで真理を求める気持ちが起きないかぎり、まっしぐらに終点まで駆けおりてしまう。

結婚や家庭の必要を認めず社会の単位は個人であるというものは、人間は人間であり、男とか、女、父とか母などにこだわってはならないという。男と女といっただけで差別だとさわぎたてるものもいる。だが、性の違いを無視して男が女のように女が男のように生きるのは、その可能性はともかく、果たして望ましいものだろうか。性転換のすえ女性の仲間入りをする男は欠陥品にすぎない。同様に男になりたい女も本質的には持っていない機能を要求され、自己のエッセンスを切りすてることになる。人間を白人、黒人、黄色人種などにわけてはならない。アメリカ人、ドイツ人、日本人などにわけるのもいけない。これらは差別につながる。また大人と子供、老人と若者に分けることにも差別がある。

しかし男であり女であることは、国籍、皮膚の色、年令、立場や地位の違いではなく、厳とした構造上の違いであり、人間性をつくりあげるふたつの異なる因子である。あたかも人間という存在の割り符のように、そのふたつが合わさって一人前になる。そこには当然、あい補う異なった機能がある。この男女の違いまで取りはらおうとする考えは、実存の影をうすくし、先ほどの一本道をつっ走る考え方だ。

もう一本の道は、アッラーという唯一の真理を求め、アッラー以外の一切の権威を認めず、あら

ゆる迷信や脅えから解放され、男は男らしく女は女らしく、本当の人間として自由に生きるための道である。しかしこれが今日のイスラーム社会ではない。そこには迷信に脅え、人間の権威を鵜呑みにし、知識も求めず、人間本来の生き方から外れたものも多いからだ。真のイスラーム社会なら、そうはならない。教えを誤用しているものをみて、教えそのものを捨てることはない。

イスラームは男女の別を重視する。それぞれの特色を生かすため一部異なった種類の制限を課している。これが差別だろうか。それとも一部異なった生き方をするからこそ、大局的にみて人間として平等になるのではなかろうか。人間存在の割り符である半分と半分が結合して一になるからこそ、結婚が大事だ。結婚しないものは、あくまで半分のままである。だからイスラームは社会の単位を家庭とする。そして人間とは男であり女であり、父であり母であり子であり、これらは人間性の中に融合した切りはなすことのできない崇高な部分であるとしている。

四、未来への基地＝家庭

ところで、人間とはいったいなんだろう。

何のために生き、なぜ死ぬのか。

イスラームでは、人間はアッラーを崇拝するために存在し、アッラーの代理者として地球を管理する役割を担い、そのために限定された範囲で能力と自由を与えられているという。この世は人間

の永遠の生命のひと区切りであり、与えられた能力と自由によってアッラーを求め、なにものにも強制されず自発的に善悪を選択し、自分のゆくべき道を定める。そして生と死に区切られた一定期間終了後、人生におけるプラスとマイナスの総決算を経て、天国か地獄へゆく。

アッラーの別名は真理、慈悲、正義、平和、その他もろもろの究極の善であり、それらの美徳を発する光である。これに対して人間の魂は、その光を受け、反射する鏡にたとえられる。アッラーを求めることは、その光を受けるために魂を磨くことで、アッラーを崇拝することは自分を高めることになる。アッラーの光を魂の鏡から反射し、隣人によい影響をあたえ、その光りに満ちた豊かな人類社会を建設することだ。これらの善や美徳をそれぞれ別個のものと考えてはならない。その根本において慈悲、正義等はひとつである。この唯一の源を求め、崇拝すべきだ。

アッラーの代理者として地球を管理するためには何をすべきか。個人、集団、国家などが独自の立場で遂行できる任務ではない。互いに意見を交換し世界中の合意をえて、はじめて可能となる大任だ。そのためには相手に教えるのではなく、互いに学びあい、より優れた共通の理念に到達することをむねとすべきだ。だからイスラームは宗教に強制があってはならぬという。宗教という言葉は一般に実生活から離れた理念と受け止められているが、イスラームでは人間の生き方、道、思想などのすべてを含む。つまり、なにごとにおいても強制はいけないことになる。お互いの考え方の違いを尊重しながら協力し、共通の未来を達成するのだ。

世界全体が共通の目的に達するために協力することをイスラームは重視する。蟻に学べ、蜜蜂に

学べ、人類平等、集団礼拝、大巡礼、慈善、断食、隣人への思いやりなど、教えのすべてのシステムが唯一アッラー崇拝の目的のもとで全体の和合を示す。礼拝においては全員が同じメッカの方角へ顔を向け、終わりには世界中の兄弟姉妹と挨拶（サラーム）するため顔を右と左へ向ける。メッカに顔を向けるのは、そこにアッラーがいるからではない。アッラーは宇宙を創造し、宇宙を存在せしめる唯一根源のちからであるから、宇宙全体にみなぎっている。ただ、人間の合体をはかるため、世界中のどこにいても、あるいは月や他の天体にいても、同じマッカの方向へ顔を向けるのだ。人間は宇宙の根源である唯一のアッラーを意識し、同じ唯一のアッラーをゴールとし、そのアッラーに定められた道を歩めば、一心同体である。イスラームの預言者は「ムスリム達は一個の人間のようで、身体の一部が痛めば、体の全体が痛みを感じる」といっている。

数億万のパーツが寄り合ってひとつの宇宙船を構成するように、イスラームはアッラーの道で飛翔し世界を光りで満たすため、人類の良き部分を合体させようとする。そのはるかなる目的地は唯一の神、アッラーである。宇宙船をつくる工場においてパーツが選別されるように、いつの日か人間も選別されよう。これが最後の審判であり、不良品は溶鉱炉に投げられる。

人間の身体は、その頭脳も含めて、先祖伝来の遺伝子の総合体である。ということは人間の一人ひとりはすでに個々の存在ではなく、微視的レベルにおいて先祖からの遺伝子の統合国家であり、現代に送り込まれた先祖からの代表選手である。むろん人間完成の道をゆくためだ。

人間は人生で得た経験・体験を社会のために役立て、その凝縮された部分を文化として、あるい

は遺伝情報として、次の世代へ伝える。だが文化や遺伝情報は人間の未来に対処する許容力を備えるためのものであり、人間そのものの生き方を決定するものではない。一人の人生は本人が切り開いていくもので、あくまで本人だけのものであり、本人だけの責任である。だがその切り開いた人生の本質は凝縮されて次の世代に伝わるから、次の世代に対しても責任はある。この意味で、子は親の未来への投影であるともいえよう。

だから子を否定することは大きな目でみて自分の未来を放棄することであり、親を否定することは自己の存在要素と構成因子を否定することになり、同様に一種の自殺である。人間はこのことを本能的に理解している。それが親子の愛情としてあらわれる。親の子にたいする愛情は、子の親にたいする愛情より強い。親は過去であり、子は未来であるからだ。ある時期において子は親の愛情の押し付けをわずらわしく思いはじめる。子が親の投影ではありながら別個の人生を歩んでいることを早くから双方が理解しないと断絶が起き、自殺、子殺し、親殺しなどがおきる。この人間性の全体的な流れを把握せず、人生の意義について解答をもたず、人類全体としてのはるかなゴールを意識しなければ、社会の混乱や不安はおさまらず、世界平和も達成できない。

子は親から遺伝子を受け継いで顔かたちや体軀、あるいは機能など似かよった面をもって生まれてくる。親はそこに自己を再発見し、父性愛と母性愛を刺激され、子を守り育てる。子を護るためには命まですてる場合もある。もちろん母性愛の方がくらべものにならないほど強いが、父性の愛も応分の役割をもつ。無力な赤子にとっては最善の安全地帯が親と一緒にいる家庭であり、赤子が

対人関係の一番最初に学ぶ本能的な安堵感である。この安堵感は成人して自立するまでは強く、その後も心の底の無意識の底流として一生を通じて存在感をささえる。遺伝のかけ橋によって惹かれ合い、共感をうながされ、親子間の愛情が増幅し、それが家族全員にまで波及するのが家庭である。そこでは全員が豊かな存在感をもつ。

家庭内における母親の役割は父親のそれとは比較にならない。体内に重荷に抱き、陣痛の苦しみにあえぎ、日夜神経をすり減らし、乳をふくませ、おむつを変え、子のために一喜一憂し、子を育てるために必死になる。そのために自己のすべてを投入し、子を盲愛する。この盲愛こそ母親の本能であり、その盲愛を否定してはならない。それこそ子に人間としての存在感を与える基礎的な栄養であるからだ。父親は母親の盲愛や溺愛を修正し、子にとって家庭から社会へのかけ橋となる。保育所などは補助的な意味はあるが、家庭のかわりにはなれない。そこにはすべてを投入して盲愛を注ぐ母親はいないからだ。家庭とは、子が社会へ巣立っていくための、そして人類の流れを絶やさぬための、いわば未来の基地だ。

イスラームは家族と家庭を大切にすることを命じている。イスラームの預言者は「皆さんの中で最高のものは、自分の家族を一番大切にするものだ。そしてこの私こそみんなの中で家族を一番大事にしているものだ」という。

家庭を大切にするものが人間として最高のものだ。いいかえれば家庭を大切にしないものは最低の人間だ。このことは、なにもアッラーの言葉を託された預言者のいうことでなくとも、良識ある

人々なら常識としてわきまえていることだろう。

とはいえ、現代社会において人間が自我を強調しすぎ個人を優先させるあまり、家庭は本来の機能を失い、個人と個人が生活をいとなむための共同生活の場になっている。そこには個人と個人が角つきあう闘技場があり、力をもたぬ子供は相手にされぬ。親は子の人格を無視し、発言させない。親の意見を一方的におしつけ、子の行動を監視し、微にいり細にいり干渉する。あるいは逆に、親に力がない場合など、まったく放任する。そこには子のもつべき解放感や安堵感は、もはや存在せず、壁を破る力をたくわえるまでガマンしなければならない牢獄と化している。家庭は人類の未来への基地ではなくなり、かわりに未来を破壊する放射線を出す、いまわしい場所になっている。

五、一夫多妻制

人間の尊厳を基盤とした豊かで実際的な生き方がイスラームである。あらゆる極端は悪であり、それには善とされていることの延長も含まれる。たとえば人助けに没頭して家庭をかえりみなければ、情状酌量の余地はあっても、悪になる。山の中にこもって隠者になり、アッラーのことばかり考えて家庭的・社会的責任を回避すれば、これも悪である。もっとも、悪しか選べなければ、より小さな悪を選ぶべきだ。イスラームはすべての問題に現実的な解決を与える。対人関係においてその角をとり、はじき合いをなくし、暖かく充実した隣人関係をもたらす。これは個人だけでなく、

民族や国家のありかたにまで作用する。この健全な人類社会のありかたを示す教えをみるとき、真理を求めるものなら好感をもたざるを得ず、より高度な次元からの教えであることを直観するはずだ。その理想的な社会には真摯な温和さがただよい、真剣なうちにも殺伐さはない。個人の焦燥とかっとう、人間同志のいがみあい、社会制度のゆがみ、沸騰点に達する不安と不満の爆発などへの、いわば安全弁の設けられた、バランスのとれた教えである。

その安全弁のひとつが限定された一夫多妻制である。イスラーム以前の無制限のものではなく、また隠れた陰湿な関係でもない。それは家庭を護り、男女の権利を明確にし、子の存在基盤を確定する制度だ。

現代の他の法制度は個人の自由を認め女権の回復につとめているが、男女間の自由意志による恋愛と性交を肯定し、乱交も特殊な場合を除き罪にはならない。浮気のひとつもできない男は一人前ではないという観念がまかり通り、女性もその風潮に同化しようとする。これは人間性の中の個という断片にライトを当てて強調した異様な制度であり、人類の流れを否定し社会の根本を破壊するものだ。たしかに個人の自由は尊重されるべきだが、それには他人に迷惑をおよぼしたり犯罪行為につながらないという前提がある。現代法においてもそれは定められているが、こと人類の未来におよぼす影響に関しては、人間には未来を断定する能力がないという点で、法の管轄外であるとする。個という断片だけをとりあげて過大に評価し、家庭を破壊する自由を与え、子の権利を否定し、人類の未来に混乱を投じる自由を授ける今日の歪んだ社会制度がありとあらゆる異様な現象を生み

出している。その思想こそ、一見人間の自由をみとめているようでいて、かえって人間性を牢獄に閉じ込め未来を失わせ、刹那的な生き方を強要する、諸悪の根源である。

人間は他のすべての生命体と同じく進化の体質をもつが、他の動植物と違って人間の進化は文化を通してのものだろう。現代の人間が進化の最上位にあるわけではない。それは今日の社会をみてもわかる。いまの世界は試行錯誤の混乱期にあり、それは交通の便やコミュニケーションの発達によって人々が狭くなった地球の中であっというまに引き寄せられてしまい、そのくせ人類共通の文明をもつ努力をほとんどしなかったからだ。異なる人種や民族などへのいわれのない恐れや嫌悪は人間の心にひそむ原始的な衝動によるもので、そこから抜け出すには、教育と経験と理解に頼るしかない。最初に西洋人を見た日本の村人は鬼だとおもったそうだが、日本人にかぎらず、いまでも民族、国家、人種としてのアイデンティティを無上のものとし、外国人にたいして違和感をおぼえるものは世界中に多い。

やっと近ごろ、これではならないという機運が盛り上がってきたが、人類共同体への進化の道ははるかに遠い。何世代もかけて歩まなければならない道だ。そのためには人類の流れを大切にし、子を大切に育て、人類の未来を大切にしなければならない。これは人間が無意識のうちに待っている種としての本能だ。

その本能は男性と女性ではあらわれかたがちがう。生理学的なちがいから、精子と卵子の数のちがいから、妊娠、授乳などの機能の相違から、一般的にいって男性は子にたいして女性ほどの愛情

はもてない。男性の子にたいする愛情は、もっと薄められ、広められ、次の世代全体を包含するものとなるはずだ。これは、個としての子供が必要とする世話の密度から考えて、あまりにも希薄すぎる。そこで人類の流れを絶やさないための直接の主役は女性であり、男性はよい社会を建設するなどというまえに、この主役を大切にしなければならない。さもなくば、男性のすべての夢は砂上の楼閣のように崩れおちる。

動物の場合は環境が支配する。ある種は年に一回しか性欲をもたない。ある種は年に数回。人間は人生の始めと終わりの一定期間性欲をもたないだけで、あとは自由に発揮できる。そのかわり理性で制御する。性欲にかぎらず本能を制限しなければ、それは動物の世界だ。自我が強大であるだけ、動物よりは始末が悪い。野獣のジャングル、野獣の都市が出現する。温和な市民はたまったものではない。野獣より数百倍も凶悪だ。このような都市現象は世界のところどころにあらわれている。

本能の抑圧も欲求不満をこうじさせ、度合いに応じて理性を吹きとばすまでにたかまる。アッラーに仕え煩悩を超越するはずの聖職者でさえ禁欲主義をまっとうできるものがすくないのは、それが人間の本性に反しているからだ。ましてや一般大衆に抑圧を加えることは、社会の自滅につながる。

すでに述べたように、性本能のあらわれは男女によって異なる。「人類の未来への歩みにおいて男性の性的能力は一夫一婦制を大きく超えている。一夫一婦制に固定されることは男性にとって能

力のはなはだしい制限になる。」むろん社会生活において本能の制限は必要であり、ある種の社会においては一夫一婦制が最高の形態であるかもしれない。たとえば男女がまったく同数で、すべての男性が健全な性的能力と扶養能力をもち、すべての女性が健全な母性的機能をもち、そのうえ男女が互いの相手にしか魅力を感じないという場合だ。そのようなへんてこりんな社会が存在するはずもないが、かりに存在したとしても、人間のものではなく、ロボットの世界だろう。

個々の場合、互いに相手だけを愛しつづける幸せな夫婦もあるだろう。その場合は一夫一婦制が最善かもしれない。だが社会の全体にたいして一夫一婦制が強制され、それが法の名のもとで制度化されるとき、社会のシステムは硬化し、社会は崩壊の危険にさらされる。いろいろな事情から男性の本能は他の女性を求めはじめる。抑圧が大きければ、反発も強い。需要は供給を呼び、男性に性的な快楽を与える女性の職業ができる。ある種のうしろめたさをおぼえながら、男性はそこに金を投ずる。その金にむらがる男女によって、反社会的な組織ができる。もちろん法など無視する連中だから、麻薬や覚せい剤、あるいは他の犯罪にも手をそめる。縄張りをめぐって組織同志の争いが起きる。そこから収入をえて生活するのだから、必死になり、殺人も辞さない。

人間の欲求は社会生活においてあるていど規制されなければならないが、なにがなんでも一夫一婦制にかぎるというのでは男性にとって酷だ。もし妻が病身で性交も子育ても家事もできなかったらどうなる。夫は性欲を抑圧し、妻の看病に徹し、仕事をやめて家事に専念すべきだろうか。

たしかに病気なら病院に入れれば看病してくれる。だがそれは妻として、主婦として、母親とし

ての立場を剝奪され、家庭から切り離され、患者として病院の壁の中に隔離されることだ。それがどうしても必要ならしかたがない。だがそれほどでもなければ、家庭にいて家族の好意と暖かいはげましを受けたほうが回復は早い。

家事ができなければ、家政婦を雇ってもいい。だが家政婦は働いて収入を得るためにくる。そこは自分の家庭ではなく、職場にすぎない。互いに主張と遠慮があり、すべてを打ち明けて話し合う家族の一員ではない。中世の貴族の家庭には何十年もつとめる家族同様の使用人もいた。現代の大金持ちの家庭にもいるかもしれない。その場合、使用人が夫婦で同居しているなら、長年のつきあいで子供もなつくだろう。だが使用人の立場は、双方が忘れることはあっても、どこかにあらわれ、家族の完全な一員にはなれない。

「男性側の性欲の問題も無視できない。」夫は家庭を修道院として、禁欲主義に徹するべきなのか。病身の妻を離婚してひとりぼっちでほうりだすのは非人道的だ。隠れた愛人関係をもつのは陰湿であり、家庭にひびがはいる。妻と家族の同意をえても、愛人は社会的に妻としての立場をもてないから家族の一員にはなれず、家庭のまとまりはうすれてくる。

そこで、家族の一員として、このすべてを解決できる助っ人を招いたらどうだろう。そのひとは家事も育児も看病もし、家庭を運営する。そのひとは同格の妻として社会に認められ、その立場は法によって護られる。もちろん、自分も子を産んで育てるが、家族の間でわけへだてはしない。このようなひとを迎える場合、男性の好みだけで決めてはならず、妻や子供や家族の間で検討し、み

んながなかよくやっていけるひとをえらぶべきだ。

この夫と妻の立場が逆になったらどうか。夫が病身で性的能力もなく、仕事ができず家族を扶養することもできなければ、妻は夫を離婚できる。妻は自分の財産や収入で夫を養う義務はない。離婚したときは結婚契約書に書き込まれている条件にしたがって離婚慰謝料を受け取る。夫に支払い能力がなければ、国家がそれを保証する。そして病身で生活力のない夫は社会共同体がめんどうをみる。

特殊な例だけでなく平均的な家庭においても、夫が外で仕事をして帰ってくると、家庭はいこいの場だが、妻にとって家事は幼児がいるような場合、重労働になる。夫は一週間に一日ないし二日の休みがあり、年間の有給休暇などもあるが、妻が週に二日の休みをとって夫も家庭も赤子もほったらかしてどこかに行ってしまったら大変だ。あるいは年に数週間の休暇をとって、幼児を夫にあずけて出ていったらどうなる。このような角度から考えると、二人以上の妻がなかよく家事に当たることができれば、女性にとってもずっと楽になる。

イスラームの限定された一夫多妻制は、このような観点からみて社会の安全弁である。妻は四人まで認められるが、夫は妻たちを同格・同等に扱わなければならない。これは親切、思いやりなどの精神面と衣食住、贈り物などの物質面でまったく平等に扱うことである。これは夫にとって大変なことであり、もし平等に扱う自信がなければ一人だけにせよ、とイスラームはいう。それどころか聖クルアーンでアッラーは「なんじらは、いくら望んでも、女たちを公正・平等に扱うことは困

難である」と断言している。

明らかに、イスラームは一夫多妻制を強制しているわけではない。公正・平等に扱うことができない場合は、一夫一婦制の方が望ましいといっているのだ。それでもある種の状況のもとで一夫多妻制がよい結果をもたらす場合を認めて、家庭不和と社会的混乱への安全弁としている。ここで、法によって絶対的に禁止してしまい種々の弊害をもたらす社会と、場合に応じて許容する社会の、いずれが柔軟性にとんだ現実的な社会だろうか。

六、一妻多夫とのちがい

もし、場合によって一夫多妻制がゆるされるなら、場合によっては一妻多夫がゆるされてもよいのではないか。複数の妻による家事が女性の重荷を軽減するなら、複数の夫による扶養も男性の責任を軽くするはずだ。人間として平等なら、夫にゆるされることは妻にもゆるされていいのではないかとの疑問が生じる。

この場合どのようなことが起きるか考えてみよう。妻が妊娠したとする。子は母のものにまちがいない。だが父親はだれなのか。精密な計算のもとに一定期間は一人の夫とすごし、次の期間は他の夫、というぐあいなら認定できるかもしれない。しかし順番がまわってくるまでの夫たちの性欲は否定するのか。それともその間の浮気は公認するのか。否定するのは不公平であり、公認すれば

性の乱れがやはりはびこる。

あるいは、血液型のちがう夫たちをえらべばよいかもしれない。だがその場合、子が生まれるまで父親は判定できず、夫は不安と焦燥の中で待たなければならない。男性はそれほど忍耐強くはない。自分の子かどうか早く知りたがる。知ることができなければ、去っていくだろう。もっとも、途中で母親の腹部に針を刺して大きくなった胎児の血液をとることは可能かもしれないが、それは危険であり、残酷でさえある。そして一人の夫の子を妊娠したときは、他の夫の子はその十ヵ月後にしか受胎できない。

よほどの美女か桁ちがいの財産や収入のある女性でなければこのようなケースは成立しないだろうが、ま、それでも男性側の忍耐があって一妻多夫の家庭が運営されたとしよう。子が何人かいる。父親がやってくる。「今度はぼくのパパ？」、「おねえちゃんのよ」、「ふうーん」というぐあいになり、子は違和感をかみしめて育つ。母は自分のものでも、父は姉と弟ではちがう。当然、自分の父の方が優れていると喧嘩になる。

結婚とは人類の流れを絶やさぬためのもので、家庭は、子が育つために社会的に認められた健全な基盤を与えるためのものである。一夫一婦制や一夫多妻制では、母は自分のものであり、父も自分の父である。両親は、はっきりしている。一妻多夫では、そうはいかない。母親ははっきりしているが、子の父親がだれなのか、父親自身さえわからない。もちろん、そのような疑問は一夫一婦制や一夫多妻制でも生じ得る。それは妻への不信である。愛情と信頼があれば、よほどのことがな

いかぎり、そのような不信に陥ることはない。だが、一妻多夫では疑惑と不信をわざわざかきたてる方式になっている。男と女を同等の人間とし、かれらのためだけを考えるなら、好みの生き方を採ればよいのかもしれない。結婚さえ不要かも。人類の流れを考えず、子を否定し、人間性の断片である個と個の独立させる方式なら、このようなことも考えられる。だがその考えかたは、この問題にかぎらず、多くの矛盾と歪みを社会にもたらしている。

男性の精子と女性の卵子が結合して、子ができる。この神秘的な作用を調べると、卵子は膜の中にいて、ある精子は拒否し、ある精子は受けいれることがわかる。つまり、億という精子の中から好みのひとつを選び出しているのだ。もし卵子が女性の凝縮されたエッセンスなら、そのレベルにおいて女性は一人の夫しかいらないのだ。

男性に受精能力がなければ、はなしはべつだ。母性本能を絶たれ、一生子がもてず、人類の流れに貢献できないまま死んでいくわけにはいかない。それが確実なら、離婚できる。もちろん、双方がまったく正常であっても子をもてない場合もあるだろう。また不可能とされても子が生まれる場合もある。現代医学も絶対ではない。夫婦は希望をもちつづけるべきだ。まえにも述べたように、奇跡がおきるかもしれないし、その肯定的な姿勢は世のため人のために有益であり、そして自分のためにも大きな充実をもたらす。

人類の健全な未来を建設するため、その未来を担う次の世代に家庭という健全な基盤を与えるため、イスラームは女性が複数の夫をもつことはゆるさない。それは女性の特質に反するという。そ

して一夫多妻制は問題解決のための一策として提示されているにすぎず、その方策を採用するかどうかは当事者にまかされている。

七、女性の服装

社会の単位を家庭とするイスラームは、健全な家庭を築くため以外の性的交渉をゆるさない。乱交や浮気などすべての結婚以外の性交は、単なる不品行ではなく、社会の基盤をゆるがす犯罪である。そこで、ただ禁止するだけでなく、そのようなことが起こりにくいように定めてもいる。男女のデート、あるいは男女複数によるパーティなどはゆるされていない。男は男同志の会合をもち、女は女同志の会合をもつ。なにかの会議や集会で男女が合流することがあっても、そこではできるだけ性の誘惑を避けるようにする。

この大前提にたって、男女の服装に関する教えがある。アッラーは男性を強く女性を美しくつくられたというが、女性の姿形は性的魅力にあふれているから、男性同様の服を着るわけにはいかない。

聖クルアーン第三三章五九節には「預言者よ、妻や娘たちや信者の女性に長衣をまとうようにいえ。（女たちの立場が）知られ、きずつけられないように・・・・・」とある。この「長衣をまとう」という言葉から保守派は顔を含めた全身を隠す意味に解釈する。現代社会において短いスカ

ートや肌を露出するドレスなどで夜道をひとり歩きする女性が性犯罪をひき起こしやすいことをみても、その点はわかる。だが長衣がなぜ顔まで隠すのかは、この句からは判断できない。

聖クルアーン第二四章三一節では「外にあらわれるもの以外は、女性の美や飾りを見せてはならない」というが、保守派は通常外にあらわれるのは目と、手首から先と、足のくるぶしより下だけだと断定する。同じ節で「ベールで胸を覆え」とトップレスは禁止されているが、このベールは髪を覆うものとする。

預言者の言葉として「外にあらわれるのは、こことここである」とされ、預言者がどこを示したのか学者間の論議の的となっているが、少数の保守派は目と手の平だとし、大多数は顔と手だとしている。だからイスラーム圏でも顔を隠さない女性は多い。しかし問題は「通常外にあらわれる美と飾り」である。ある種の社会で女性が顔と全身を隠すのが習慣なら、それは通常外にあらわれないものだ。他国からきた女性もその慣習には従わなければならない。

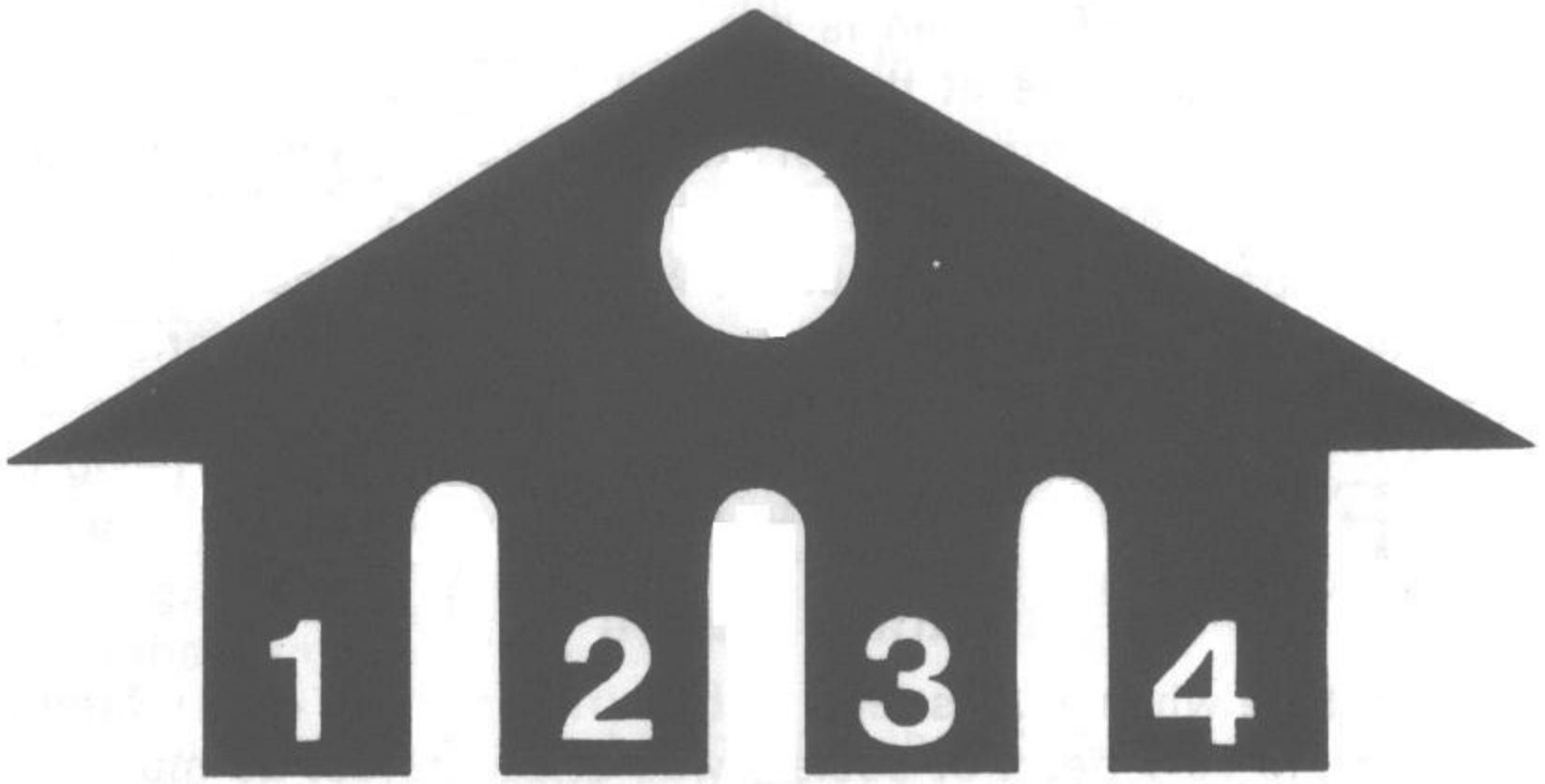
いずれにせよ、イスラームは預言者の言葉として「後世において学者たちの間で意見が分かれる場合があろう。これは信者へのアッラーからの慈悲である。信者はどの学説に従ってもよい」と伝え、信者に自由を与えている。イスラームはゆるされていることの限度を示し、そこから逸脱してはならないという。そして学者の一部は逸脱することをおそれるあまり、限度より手前に厳しい線をひいてしまう。反面、一部の少数派はあまりにもリベラルにとらえ、限度を越えてしまうようにみえる。どの説を採用するかは信者の良識にまかされている。だが、かりにも学者とされるほどの

ものなら、自説にたいして聖クルアーンと預言者のハディースから相応の根拠をもつはずであり、まちがいと断定するわけにはいかない。

イスラームは異性のあいだがらを大切にする。そして、とくに女性の立場を尊重する。女性が自分の性的魅力を安売りしなければならないのは正常ではない。女性のヌードが本にあふれ、テレビを通じて茶の間にまで入り込むのは、女性にとって（人類にとって）プラスになることではない。その刺激的なムードの中で男性の女性への憧れはかえって消失していく。より直接的、より刺激的な触れ合いを求めるようになり、その延長線上には性犯罪がある。人類の流れを大切にせず、家庭を社会の基本単位とせず、人間性の個という断片だけをみつめる社会においてはあたりまえの風潮だろう。そしてその渦は小学生まで巻き込んでしまっている。

人間は男女ともに、性の問題を大切にし、人類の未来をみつめなければならない。そして、なぜ人間が存在するのか、どこから来てどこへ行くのかを問うべきだ。この姿勢をもって、はじめて世界平和やいろいろな社会問題に対処できるだろう。男女の服装も、性の問題を大切にするひとつのあらわれだ。良識をもって採用すべきだ。

FIRM AND SHELTERING STRUCTURE OF ISLAMIC FAMILY LIFE



1st Pillar: Home and Encouragement

2nd Pillar: Eros and Children

3rd Pillar: Sympathetic Virtues

4th Pillar: Refuge

An ever valid and never outgrowing aspect of Islamic family life is, however, that the strength of all the four pillars is made up by the system. And it must not be forgotten, that the benefits of family life are extended not only to blood relations but encompass also the world-wide family of Muslims, the Islamic brotherhood.

With compliments to:-

THE ISLAMIC FOUNDATION
223 London Road,
Leicester LE2 1ZE
United Kingdom
Tel: (0533) 700725

believe that these laws and social regulations regarding women contain certain fundamental truths which will benefit whoever applies them. The present time of widespread rethinking of the role and rights of women is perhaps the appropriate time to look with fresh eyes at the Islamic point of view, which has contributed to the formation of stable societies in both sophisticated and underdeveloped peoples in vast areas of the world over the past fourteen centuries, which has retained the continuity of its principles, and from which the Western world may have something to learn.

FAMILY LIFE IN ISLAM

Fatima Heeren

In a time when values tend to be turned upside down, family life as the very heart of society was attacked just as much as many other handed-down traditions. About ten years ago, when it became fashionable for young torch-bearers of "Modernism" to live in "communities", share sex and children and earnings, many people feared that this might mean the end of family life. Fortunately, this is not so. In the end, the overwhelming majority of young women still dream of having a wedding ring on their finger, living in a comfortable flat as "Mrs. So-and-so" and bringing up their children in an orderly home, just as young men prefer to introduce "her" with the words "This is my wife" instead of "this is my mate or comrade". Neither Socialism nor any other "isms" were able to uproot what has been implanted into human nature from time immemorial.

If dangers for family and particularly matrimonial life could be overcome successfully in the West, they were the more unable to gain ground in the Muslim World. There, family life with all its aspects concerning not only husband, wife and children, but all other relatives too, is so firmly established by tradition as well as by religious law that it could not be affected seriously.

WOMAN IN ISLAM

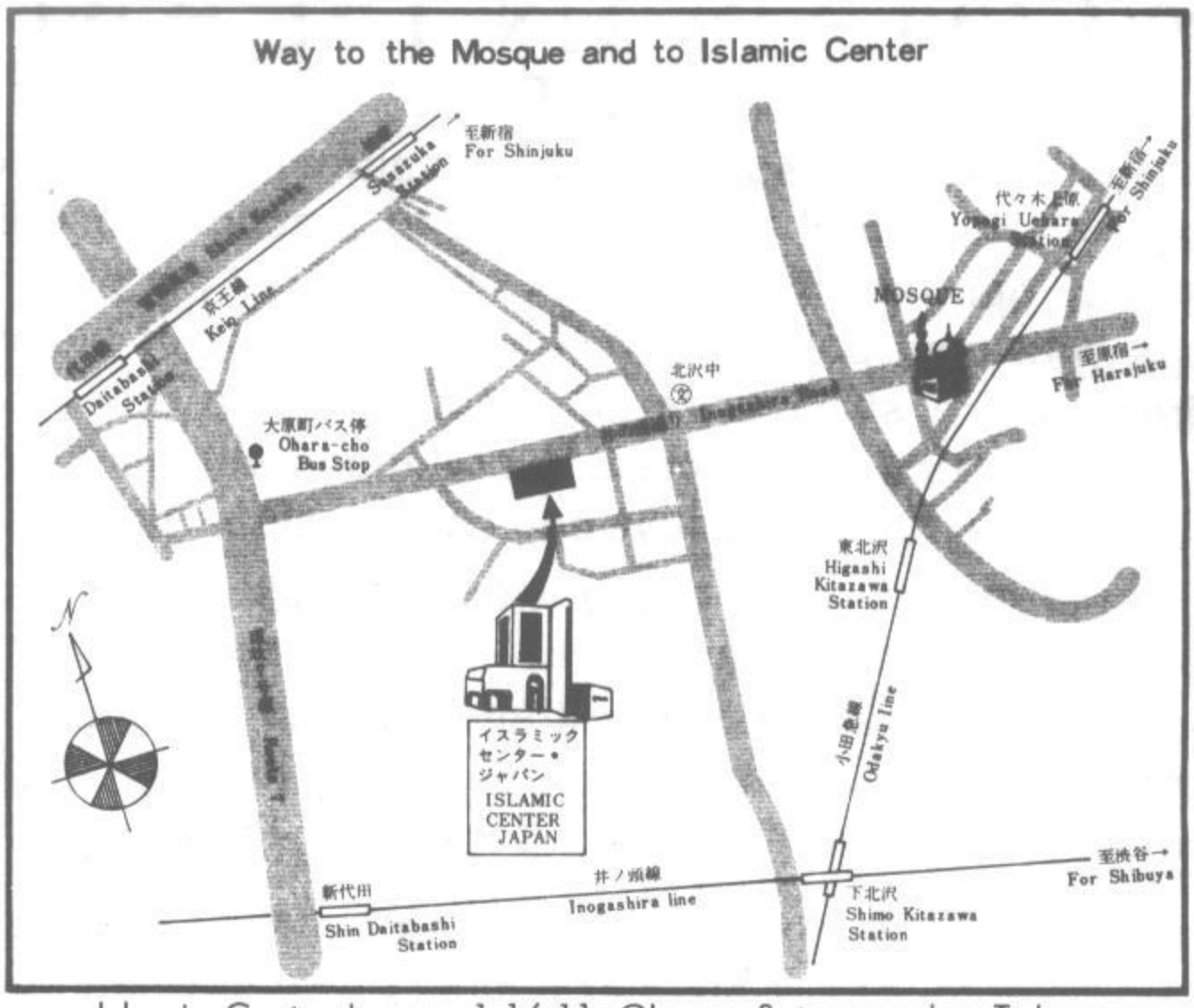
B. Aisha Lemu

The Muslim woman is accorded full spiritual and intellectual equality with man, and is encouraged to practice her religion and develop her intellectual faculties throughout her life. In her relations with men both are to observe modesty of behaviour and dress and a strict code of morality which discourages unnecessary mixing of the sexes. Her relations with her husband should be based on mutual love and compassion. He is responsible for the maintenance of the wife and children, and she is to give him the respect due to the head of the family. She is responsible for the care of the home and the children's early training. She may own her own property, run her own business and inherit in her own right.

She may not be married without being consulted and is able to obtain divorce. The system of limited polygamy can be seen to have its uses which may be in the interests of women as well as men. Finally she can look forward to an old age in which she is respected and shown every care by her children and by the society as a whole.

It would appear therefore that the Islamic system has achieved the right mixture of freedom and security that women seek and that is in the interests of the society as a whole. As I mentioned at the start of this paper, I have given the relevant quotations directly from the Qur'ān and *ḥadīth* since these are obviously the most authentic sources. If at different times and in different places these principles and laws have sometimes been distorted, ignored or flouted, it is not the principles and laws which are at fault, but man's selfishness which sometimes leads them to distort, ignore and flout what they do not like, and turn aside from the truth.

Fortunately no one has changed or can change the words of the Qur'ān, and the regulations for the protection of women which were revealed in the 7th century can be easily verified by anyone in the 20th century, as we have just been doing. I

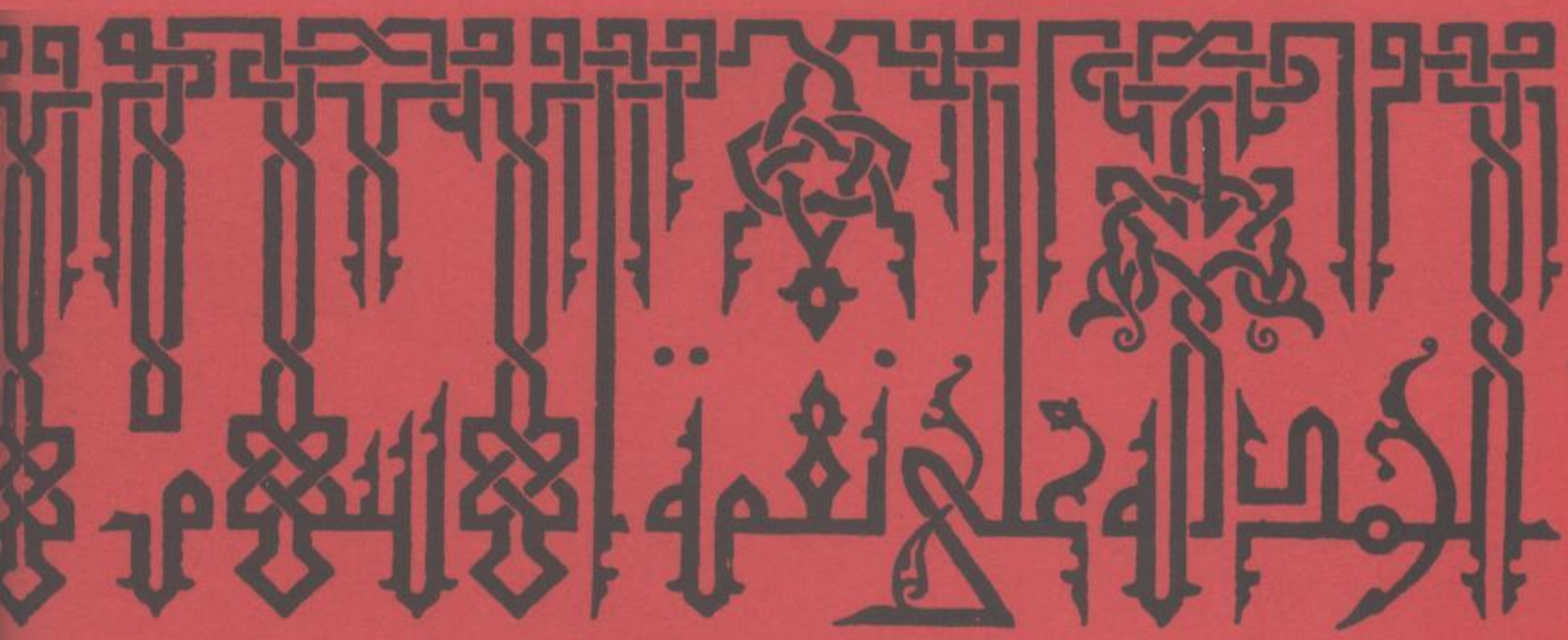


Islamic Center Japan 1-16-11, Ohara, Setagaya-ku, Tokyo
〒156 東京都世田谷区大原1-16-11 TEL.(03)460-6169㈹

東京モスクは現在再建の為、取り壊しとなっています。聖クルアーン朗唱テープやイスラームに関する講演、討論会のテープ、その他の諸文献、刊行物並びにイスラーム圏諸国に関するフィルムについては、当センターへお問い合わせ下さい。当センターでは、相互理解を深めるため、皆様の御利用をお待ちしております。

1996年6月30日発行　第6版3000部

宗教法人　イスラミックセンター・ジャパン

所在地　〒156 東京都世田谷区大原1－16－11
TEL　(03)3460－6169
FAX　(03)3460－6105

株式会社ダイシンプリント